

て、巢を立て後親鳥の少し追頃を見て、小籠へ取べし、巢くさは野老の毛、藁のみごのかたを、はか
 ま少しかけて切、是を入べし、まづ大かたは藁にて作り立る物なり、又鳴の腹毛、杯入もあり、まか
 し、是は入らぬものなり、巢は春秋になす、玉子産時分、雌よく落るもの也、至て産のおもき鳥也、庭
 籠の廣きはさんぐ、あしきもの也、玉子は十六日にてかへる、粟きびのもやしを飼ふ、又菜をこ
 まかにた、きて、庭籠へ入置事よし、赤土を少しづ、入置べし、餌にかみ交て子に喰せる物也、子
 は三十日餘も過ざれば、巢を立す、子にはきびと、あわゑごまも飼ふべし、春はひがんの頃、庭籠へ
 放すべし、餘寒つよき年は、其心得にて少し遅く放すべし、又井戸繩の古きを二三寸程づ、に切
 て入たるもよし、然共、これはあまり巢に引鳥なし、文鳥に巢の時、人參をかふ事、散々悪し、度々た
 めして是をまゐる、初心の者とかく人參を用ゆ、人參を飼ふ時は、必雌を落す、秋の巢の時、きびあ
 わともにもやしの間に合ぬ事有、其時はきびあわとも、摺鉢へ入、湯にてまばらくひやし、扱そ
 れをさらく、とかるくするべし、右のごとくにする時は、上の皮取れて、實所計に成なり、是を庭
 籠の中へ入おくべし、

〔飼鳥必用〕文鳥

此鳥世に澤山に相成、鳥のよふすは勿論、飼方人々委しく候間、書之ず、庭籠玉子産込巢に付候節、
 水入の水洗不申、水の上江たし水にてよろし、水きよければ、雄水をあび、おひ盛りいづるもの也、
 尤盛り薄き鳥は、水きよくして、度々かへる事よし、世の人は是をまゐる事なれども、此處に記す、

〔塋囊抄〕鳥類字 鶉イヌカ

〔日本釋名鳥〕中いすか 其口ばしくひすがひてあはず、上下を略せり、

〔本朝食鑑〕六林禽伊須加鳥訓如

集解、狀大如鶉、而頭背蒼赤、腹臆最赤紫色、背蒼而齟齬、作又、故俗稱世之相違者曰、如伊須加之鶉、食